

『星の王子さま』からのメッセージ

保 田 正 毅

キーワード

基本的存在様式 fundamental style for being 持つこと to have あること to be
おとな対子ども a man vs. a child 反ファシズム anti-fascism

1. 『星の王子さま』を読む視点

1998 年度前期の「基礎演習」のテキストに、サン＝テグジュペリ作『星の王子さま』をとりあげた。『星の王子さま』は児童書の体裁をとってはいるが、そこに盛られた意義深いメタファ（暗喩）、シンボル（象徴）、アレゴリー（寓意）などによって、読者を人生省察へと誘う点で、学生にも是非読んで欲しいと考えたからである。とりわけコミュニティ政策学部の学生には、本書を通して〈人間の生き方とコミュニティ形成〉の問題について考える契機になれば……という思いもあった。

このノートは、人間の生き方に関する E・フロム（Erich Fromm 1900～）の所論を手がかりに、『星の王子さま』のメッセージを読み解こうとする一つの試みである。E・フロムは、人間の生き方を分析したその著 To Have or to Be（1976、佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊国屋書店、1977）において、人間存在の二つの様式としての〈持つこと〉と〈あること〉の違いを分析した。〈持つ〉存在様式においては、世界に対する私の関係は所有し占有する関係であって、私が自分自身を含むすべての人、すべての物を私の財産とすることを欲するという関係である（訳書 46 ページ）。この関係は、主体をも客体をも物に還元することによって、生きた関係は結ばれることはない。他者との関係においては支配、冷淡、孤立といった死んだ関係があるのみである。

これに対して〈ある〉存在様式においては、E・フロムは二つの形を確認しなければならないという。一つは〈持つこと〉と対照をなすもので、生きていること、世界と真正に結びついていることを意味する（同 46 ページ）ということである。すなわち何ものにも執着せず、何ものにも束縛されず、変化を恐れず、たえず成長することである。他者との関係にお

いては与え、分かち合い、関心を共にする生きた関係を結ぶことである。〈あること〉のもう一つの形は〈見えること〉と対照をなすもので、偽りの外観とは対照的に、人あるいは物の真の本性、真の現実と言及するものである (同 46-47 ページ)。

『星の王子さま』を以上のような視点から読み解いてみるとどうであろうか。結論的に言えば、王子さまは7つの星めぐりやキツネとの出会い・学びを通して、〈持つ〉存在様式から決別し〈ある〉存在様式を選びとっていったこと、〈ある〉存在様式の生き方において王子さまは他者 (自分の星に残してきたバラ) に対して、関心を共にする生きた関係 (愛すること、分かち合うこと、与えること、責任を引き受けること、など) を築くことができるということ、そしてこのような生き方を飛行士に「伝える」ことを通して、当時ファシズム (それは政治の世界における〈持つ〉存在様式の典型である) と戦っている人々 (読者) を励まそうとしたのではないか、ということである。

なおテキストには、内藤 濯訳『星の王子さま』(岩波少年文庫 2010, 1976) を使用した。
(引用箇所末尾のアラビア数字はそのページを示す。)

2. 『星の王子さま』の構成

本論に入るに先立って、この作品全体の構成がどうなっているか、みておきたい。

小島俊明はその著『おとなのための星の王子さま』(近代文芸社, 1995) において、次のような三部構成と考えるのが妥当であろう、と述べている (同 13 ページ)。

- 第一部 〈王子さまの星〉
献辞 (プロローグに相当)
1 ~ 9 章
- 第二部 〈アレゴリーの星たち〉
10 ~ 16 章
- 第三部 〈希望の星〉
17 ~ 27 章
(エピローグ)

このように小島は、物語が展開される舞台 (星) を中心に三部構成を提唱した。これはこれで作品世界を把握する上で、一つの手がかりとなるかも知れない。しかし、『星の王子さま』の物語の世界はそれほど単純ではない。何よりも小島の三部構成では、作品世界の上で重要な役割を担う、王子さまと飛行士との〈出会い〉や〈別れ〉が構成上明らかにされない。そこで筆者としては、先に述べた「読む視点」に基づいて次のように作品全体の構成を把握しておきたい。なお王子さま (A) は、生き方について〈ある〉存在様式を学びとった王子さまを指し、王子さま (a) はそれ以前の王子さまを示す。

献 辞（プロローグに相当）

第一部 王子さま（A）と飛行士との出会い

1～3章

第二部 王子さま（A）のふるさとの星

——王子さま（a）が当面した人生問題——

4～9章

第三部 王子さま（a）による7つの星めぐり

—生き方についての、王子さまの学習の旅—

10～23章

第四部 王子さま（A）と飛行士との別れ

24～27章

エピローグ

3. 献辞に表明された著者の生き方

『星の王子さま』は、第二次世界大戦中亡命先のアメリカで、クリスマス用の児童読物として著わされた。その冒頭には次のような献辞がおかれている。

レオン・ウェルトに

わたしは、この本を、あるおとなの人にささげたが、子どもたちには、すまないと思う。でも、それには、ちゃんとした言いわけがある。そのおとなの人は、わたしにとって、第一の親友だからである。もう一つ、言いわけがある。そのおとなの人は、子どもの本でも、なんでも、わかる人だからである。いや、もう一つ言いわけがある。そのおとなの人は、いまフランスに住んでいて、ひもじい思いや、寒い思いをしている人だからである。どうしてもなぐさめなければならない人だからである。こんな言いわけをしても、まだ、たりないなら、そのおとなの人は、むかし、いちどは子どもだったのだから、わたしは、その子どもに、この本をささげたいと思う。おとなは、だれも、はじめは子どもだった。（しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない。）そこで、わたしは、わたしの献辞を、こう書きあらためる。

子どもだったころの

レオン・ウェルトに

献辞は一般に、その著書を献呈する相手の名前だけを記すことが多い。この場合でいえば、普通ならば「レオン・ウェルトに捧げる」と記すだけで済むのである。しかしサン＝テグジュペリはそうはしなかった。レオン・ウェルトに捧げた理由を述べ、最後にあらためて「子ど

もだったころのレオン・ウェルトに」と記している。献辞としては誠にユニークである。読者である私たちは、そこに著者の重要なメッセージが表明されている、と考えるわけにはいかない。

『星の王子さま』を捧げられたレオン・ウェルトという人は、ユダヤ人作家であって、サン＝テグジュペリが心を許せる終生の友人であった。彼はフランスに住んでいて、「ひもじい思いや、寒い思いをしている人」だから、彼を慰めようと思って本書を書いた、と著者はいう。当時フランスはナチス・ドイツによって占領されていた。周知のように、ナチスは占領地域のユダヤ人を徹底的に迫害し、絶望の淵へと追いやっていた。サン＝テグジュペリは亡命先のアメリカから、そうしたユダヤ人である友のおかれた境遇や心情に思いを寄せ、彼を「なぐさめる」ために、『星の王子さま』を書いたのである。私たちはそこに深い友情と非人道的なナチス・ドイツに対する抵抗の姿勢を読み取ることが出来る。E・フロムの基本的な存在様式論からすれば、著者サン＝テグジュペリは献辞を通して、自分の生き方が〈ある〉存在様式の立場であることを表明する。友達をもつこと、ナチスによって迫害されている友を思いやること、『星の王子さま』を書いて友を慰めようとする、ナチスに対して抵抗すること、これらは〈持つこと〉と対照をなす〈ある〉存在様式の重要なメルクマールである。

献辞にはもう一つ重要なメッセージがある。それは、「そのおとなの人は、むかし、いちどは子どもだったのだから、わたしは、その子どもに、この本をささげたいと思う」というくだけたものである。ここで献辞の対象とされている〈子ども〉には二重の意味が込められているように思われる。一つは、大人へと成長を遂げていく存在としての子どもである。あの第二次世界大戦、地球上のいたるところで人と人々が殺し合い、いわば地獄と化したこの地球の未来を、そうした子どもに託そうとしたのではないか。

いま一つは、〈おとな〉と対比してとらえられた〈こども〉である。『星の王子さま』に登場する〈おとな〉たちは、飛行士を除いてほとんどすべての者が〈持つ〉存在様式の価値観にとらわれてしまっている。そうした〈おとな〉と違って、旺盛な好奇心によって物事の本質へと迫っていく能力を秘めた存在としての〈こども〉。そうした〈こども〉であれば、大人であれ子どもであれ、誰でも『星の王子さま』のメッセージを正しく受けとめてくれるのではないか。著者サン＝テグジュペリのそうした願いが、この献辞には込められているように思われる。

4. 物語の語り手である飛行士が当面した人生問題

『星の王子さま』は語り手である飛行士の身の上話から始まる。著者はそこでファシズムに蹂躪されていく当時の国際情勢を巧みな比喻によって暗示するとともに、飛行士が当面した生き方をめぐる問題を読者である私たちに提示する。



六つのとき、原始林のことを書いた「ほんとうにあった話」という、本の中で、すばらしい絵を見たことがあります。それは、一匹のけものを、のみこもうとしている、ウワバミの絵でした。これが、その絵のうつしです。

その本には、「ウワバミというものは、そのえじきをかまわずに、まるごと、ペロリとのみこむ。すると、もう動けなくなって、半年のあいだ、ねむっているが、そのあいだに、のみこんだけものが、腹のなかでこなれるのである」と書いてありました。

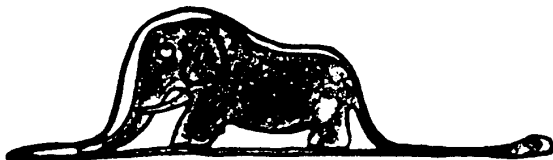
ぼくは、それを読んで、ジャングルのなかでは、いったい、どんなことがおこるのだろうと、いろいろ考えてみました。そして、そのあげく、こんどは、色エンピツで、ぼくのはじめての絵を、しゅびよくかきあげました。ぼくの絵の第一号です。それは、上のようなものでした。

ぼくは、鼻たかだかと、その絵をおとなの人たちに見せて、〈これ、こわくない？〉とききました。

すると、おとなの人たちは〈ぼうしが、なんでこわいものか〉といいました。

ぼくのかいたのは、ぼうしではありません。ゾウをこなしているウワバミの絵でした。おとなの人たちに、そういわれて、こんどは、これなら、なるほどとわかってくれるだろう、と思って、ウワバミのなかみをかいてみました。おとなの人ってものは、よくわけを話してやらないと、わからないのです。ぼくの第二号の絵は、つぎのようなものでした。

すると、おとなの人たちは、外がわをかこうと、内がわをかこうと、ウワバミの絵なんかはやめにして地理と歴史と算数と文法に精をだしなさい、といいました。ぼくが、六つのときに、絵かきになることを思いきったのは、そういうわけからでした。…（中略）…



そこで、ぼくは、しかたなしに、べつに職をえらんで、飛行機の操縦をおぼえました。そして、世界じゅうを、たいてい、どこも飛びありました。…（中略）…

ぼくは、そんなことで、そうこうしているうちに、たくさんのえらい人たちと、あきるほど近づきになりました。思うぞんぶん、おとなたちのあいだで、暮らしました。おとなたちのようすを、すぐそばで見ました。でも、ぼくの考えは、たいしてかわりませんでした。

どうやらものわりのよさそうな人に出くわすと、ぼくは、いつも手もとに持っている第一号の絵を、その人に見せました。ほんとうにもものわかる人かどうか、知りたかったのです。ところが、その人の返事は、いつも、〈そいつあ、ぼうしだ〉でした。そこで、ぼくは、ウワバミの話も、原始林の話も、星の話もやめにして、その人のわかりそ

うなことに話をかえました。つまり、ブリッジ遊びや、ゴルフや、政治や、ネクタイの話をしたのです。すると、そのおとなは、〈こいつあ、ものわकारいのよい人間だ〉といって、たいそう満足するのです。(7～10)

まず冒頭の〈ウワバミにのみ込まれたゾウ〉の話について考えてみたい。この話にはどのようなメッセージが込められているのだろうか。ただ単にものの裏表という程度の比喩としては、内容があまりにショッキング過ぎよう。この内容に相応したメッセージを読み解くことがもとめられる。これについては塚崎幹夫の所説が最も的を得ている。塚崎は子どもの飛行士がウワバミの外側の絵を大人たちに見せたとき、「これ、なに？」と聞くのではなく、「これ、こわくない？」と聞いていることに着目する。そしてジャングルでの弱肉強食の世界を著者が生きた当時の国際社会につきとめ、次の事実を明らかにする。

1937年7月7日——日本、中国侵略戦争を開始。

1938年3月10日——ドイツ、オーストリアを侵略併合。

9月29日——ミュンヘン協定。ドイツ、チェコからズデーテン地方を略取。

1939年3月15日——ドイツ、チェコを解体して、ボヘミア、モラビアを併合。

4月7日——イタリア、アルバニアを占領。

9月1日——ドイツ、ポーランドに進入。

1940年4月9日——ドイツ、デンマークおよびノルウェーに侵入。

これによって明らかなように、ドイツの軍事行動はほぼ正確に6カ月ごとに起こっている。

「ウワバミというものは、そのえじきをかまずに、まるごと、ペロリとのみこむ。すると、もう動けなくなって、半年のあいだ、ねむっているが、そのあいだに、のみこんだけものが、腹のなかでこなれるのである。」

ウワバミとはナチス・ドイツであり、のみ込まれたゾウは、オーストリア、チェコ、ポーランド、デンマークなどの諸国がそれに該当しよう。塚崎はいう、「ドイツの軍事行動とウワバミの説明にある6ヶ月の周期の一致は、偶然のものではない。無邪気なふりを装いながら、彼は深い意図をもってこのエピソードを書いたのだと断言できる」と。(同著『星の王子さまの世界』、中公新書、1982 12～13ページ)

筆者もこの塚崎の所説に賛成である。このように受けとめれば、それは献辞に示されたサン＝テグジュペリの政治姿勢や第5章で紹介される〈三本のバオバブ〉の話とも見事に対応する。すなわち、ある星では住民が怠け者のために、三本のバオバブの木が巨大に成長してしまい、その根が互いに絡み合ってその星を貫き、ついには破裂させてしまう、というのである。王子さまからこの話を聞いた飛行士は、さっそく、フランスの子どもたちのために〈三本のバオバブ〉の絵を描き、〈おーい、みんな、バオバブに気をつけるんだぞー！〉と警告する。三本のバオバブとは、ドイツのナチズム、イタリアの〈ファシズム〉、日本の帝国主義

を表わしたものと解することができる。こうみてくると、『星の王子さま』は、子ども向けの単なる〈おとぎ話〉などではない。当時世界をその支配下におくべく侵略行動をとっていたファシズム―それは政治世界における〈持つ〉存在様式の典型である―にたいする批判・警告の書でもあるのである。

つぎに、語り手の飛行士が当面した生き方をめぐる問題について考えてみよう。この飛行士は子どものころ、絵かきになりたいと思っていたという。〈ウワバミにのみ込まれたゾウ〉を見ることの出来る者が絵かきになるとは、どういうことだろうか。少なくとも彼においてそれは、事物の外観にとどまらず、目には見えない本質そのものをつかみ、それを自己の感性に基づいて表現する行為に他ならない。そしてその創造的行為の成果＝作品を通じて他者と共感的関係を結んでいくのである。飛行士が子どものころ、このような〈絵かき〉になることに憧れたということは、E・フロムのいう〈ある〉存在様式の生き方を志向した、ということの意味していよう。

しかし、幼少の飛行士をとりまく世の大人たちはそれを許さなかった。〈絵かき〉になるより、「地理と歴史と算数と文法に精を出しなさい」と忠告する。地理・歴史・算数・文法は、いうまでもなく実学のメタファーであることはいうまでもないが、ことはそれにとどまらない。というのは、それらの勉強を勧めたのは他でもない、〈ゾウをのみ込んだウワバミ〉を〈ぼうし〉としかみなかった大人たちであった。そうした大人たちにとっては、地理・歴史・算数・文法の習得が事物の本質を見抜く力を養うのではなく、それらの知識の所有によって、上級学校への進学やいわゆる出世を可能にするものとして語られたのであった。

語り手のぼくは、長じて仕方なしに飛行士になり、多くの大人たちと交わるようになる。しかし、〈ゾウをのみ込んだウワバミ〉の絵を見抜く大人には出会えず、「ブリッジ遊びや、ゴルフや、政治や、ネクタイの話」をして、彼らにあわせるしかなかった。相手の関心をそそるような話題を考えて会話を交わす行為は、話者と真正に結びつかない話題（情報）を所有し、それを交換乃至は消費する行為に他ならない。それは〈持つ〉存在様式の生き方の一つの表現である（E・フロム前掲書 58 ページ）。したがってこうした会話の交わりは、表面的な交わりでしかありえず、心の絆を結ぶようにはならない。こうして飛行士は、世のおとな社会にあって、次第に孤立と孤独を深めていく。『星の王子さま』の作者は、飛行士の置かれたこうした状況を、次節冒頭で紹介するように、広大な砂漠に不時着した一人ぼっちの飛行士として描くのである。

5. 飛行士と王子さまの出会いの意味

ぼくは、そんなわけで、六年まえ、飛行機がサハラ砂漠でパンクするまで、親身になって話をするあいてが、まるきり見つからずに、ひとりきりで暮らしてきました。パンクというのは、飛行機のモーターが、どこか故障をおこしたのです。機関士も、乗客も、

そばにいないので、ぼくは、むずかしい修理をひとりでやってのけようと思いました。ぼくにとっては、生きるか死ぬかの問題でした。一週間の飲み水が、あるかないかくらいでした。

そこで、はじめての日の晩、ぼくは、およそ人の住んでいるところから、千マイルもはなれた砂地で眠りました。難船したあげく、いかだに乗って、大洋のまん中をただよっている人より、もっともっとひとりぼっちでした。すると、どうでしょう、おどろいたことに、夜があげると、へんな、小さな声がするので、ぼくは目をさしました。声は、こういっていました。

「ね……ヒツジの絵をかいて！」

「え？」

「ヒツジの絵をかいて……」

ぼくは、びっくりぎょうてんして、とびあがりました。なん度も目をこすりました。あたりを見まわしました。すると、とてもようすのかわったぼっちゃん、まじめくさって、ぼくをじろじろ見ているのです。……(中略)……

そこで、ぼくは、おどろいたあまり、目をまんまるくして、ぼくの前にあらわれたぼっちゃんをながめました。くどいようですが、ぼくは、およそ人の住んでいるところから、千マイルもはなれているところにいたのです。なのに、ぼくのぼっちゃんは、道にまよっているようすもないし、つかれきっているようすもないし、おなかがへってたまらないようすもないし、のどがカラカラになっているようすもないし、こわくてたまらないようすもありません。どこからどう見ても、およそ人の住んでいるところから千マイルもはなれている砂漠のまん中で、とほうにくれている子どもとは、とても見えないのです。ぼくは、やっと口がきけるようになると、いいました。

「だけど……あんた、そこで、なにしてるの？」

すると、ぼっちゃんは、とてもだいじなことのよう、たいそうゆっくり、くりかえしました。

「ね……ヒツジの絵をかいて……」(11～13)

いよいよ王子さまの登場である。飛行士と王子さまの出会いの意味をさぐる上で、いくつかの事柄に注目しておきたい。

第一は、王子さまが現れたときの、飛行士のおかれた状況についてである。先に述べたように、この飛行士はいわゆる世間においては心から交わる友もなく、孤独を深めていた。そしていま彼は広大なサハラ砂漠に不時着し、飲み水も一週間もつか持たないという極限状況に追い込まれている。しかも彼は救助を求めるために通信手段などを用いることもしない。「難船したあげく、いかだに乗って、大洋のまん中をただよっている人よりも、もっともっとひとりぼっちでした」——いうなればこの飛行士は、絶対的孤立と生死の極限状況におかれ

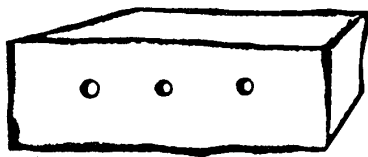
ていたのであった。

第二は、王子さまの登場の仕方である。飛行士が王子さまを最初に認知するのは、その姿・形からではない。飛行機が不時着した最初の晩の夜があげると、「へんな、小さな声がするので、ぼくは目をさました」という。つまり「小さな声」を〈きく〉ことを通して、飛行士は王子さまと出会うのである。「小さな声」とはどのような音量であろうか、いやそもそも音量があったのだろうか。〈きく〉とは聴覚によってだろうか。あるいはひょっとして、飛行士が心の奥底で〈きいた〉とも考えられないだろうか。

いずれにせよ飛行士は王子さまの声で目を覚まし、声の内容を自らの意識にのぼらせる。それがなんと「ね……ヒツジの絵をかくて！」というものであった。飛行士が王子さまと出会う最初のメッセージがなぜ「ヒツジの絵をかく」ということなのであるだろうか。しかも王子さまはそのことを「とてもだいじなことのよう」に言ったという。「ヒツジ」には何か特別な意味が込められているのではないか。

第三に指摘しておきたいことは、飛行士の前に現れたときの王子さまの様子である。広大なサハラ砂漠の真っ只中であって、王子さまは「道にまよっているようすもないし、つかれきっているようすもないし、おなかへってたまらないようすもないし、のどがカラカラになっているようすもないし、こわくてたまらないようす」もないという。つまり王子さまは飛行士と同じような生身の人間ではない、ということが示唆されているのである。

飛行士と王子さまの出会いの意味を考える上で注目しておきたい第四のこととして、王子さまと飛行士との間で交わされた次のようなやりとりである。すなわち、飛行士は王子さまの求めに応じていろいろなヒツジの絵を描くが、王子さまにはどれも気に入らない。そこで物語は次のように展開する。



ぼくは、もうがまんしきれなくなってきました。それに、モーターのとりはずしをいそいでいたので、大ざっぱにこんな絵をかきました。

そして、それをなげだすように、ぼっちゃんに見せました。

「こいつあ箱だよ。あんたのほしいヒツジ、その中にいるよ」

ぶっきらぼうにそういいましたが、見ると、ぼっちゃんの顔が、ぱっと明るくなったので、ぼくは、ひどくめんくらいました。

「うん、こんなのが、ぼく、ほしくてたまらなかったんだ。このヒツジ、たくさん草をたべる？」

「どうして？」

「だって、ぼくんとこ、ほんとにちっぽけなんだもの……」

「そんな心配、いらないよ。だから、ぼく、ほんのちっぽけなヒツジ、かいたんだ」

ぼっちゃん、絵をのぞいて見ながらいいました。

「そんなにちっぽけじゃないな……おや！　ねちゃったよ、このヒツジ……」

こうして、ぼくは、王子さまと知りあいになりました。(15～16)

このような物語の展開は、読者である私たちに、「ゾウをのみ込んだウワバミ」の絵をかいたころの飛行士と王子さまとをダブらせはしないだろうか。

以上述べた四つの事柄に注目しながら、飛行士と王子さまとの出会いの意味を考えてみたい。もちろん、そのようなことをとりたてて考えないで、ある時不思議な王子さまが突然飛行士の前に現れた物語（不思議物語）として楽しむことも出来よう。筆者も最初にこの本を手にしたときはそうであった。しかし何回も読む機会を持つことによって、現時点では次のように出会いの意味を考えている。それは、子どもの頃から久しく飛行士の胸底に閉じ込められていた、〈あること〉の生き方を志向する自我が、生死の極限状況において目ざめ、それが「王子さま」という形象を結び、物語の主人公として創造されたのではないか、ということである。

見渡す限り砂と岩しか見えない砂漠にひとり身をおいた自分を想定してみよう。しかも自らの死をも直視しなければならない状況におかれた自分をである。そのとき人はどうするであろうか。おのれ自身をみつめること、おのれの歩んできた人生を省みること、とりわけ子ども時代をなつかしむこと、そしておのれ自身へのさまざまな問いかけをしないであろうか。この飛行士の場合、そうしたとき久しく心の奥底に秘められていた、〈あること〉の存在様式を求める自我の覚醒を、最初は〈小さな声〉としてこころできいたのではないか。そしてその自我は次第に大きくなり、王子さまの姿となって飛行士の前に現れる。いいかえれば、王子さまは子どものころの飛行士の自己幻視と考えることができよう。このような理解を裏づけるようなエピソードが物語のなかに紹介されている。それは飛行士が、子どものころ描いた例のぼうしの絵（ウワバミの外側）を描いてみせると、王子さまは即座に次のようにそれを見抜くのである。「ぼく、ウワバミにのみこまれているゾウなんか、いやだよ。ウワバミって、とてもけんのんだらう……」

以上のような理解をたどれば、王子さまが飛行士との出会いの最初にヒツジの絵を求めた〈謎〉も解けてくる。極限状況におかれた飛行士が、王子さまの声として最初に〈こころ〉できいたのが「ヒツジ」であった。ウマやウシやその他の動物ではなく、なぜヒツジなのだろうか。少なくとも飛行士にとってヒツジは最も重要な意味あるものとして、また彼にとって最大の関心事として、心に留められてきたことは疑いえない。

周知のように、聖書の世界ではヒツジはしばしばイスラエルの民のメタファとして使われている。そこで、飛行士と著者サン＝テグジュペリとをダブらせて理解すれば、つまりこの飛行士を自らも飛行士であったサン＝テグジュペリの分身と考えれば、ヒツジは冒頭の献辞

の相手、ユダヤ人のレオン・ウェルトを示唆するものとして、その必然性が了解されるのである。

ところで筆者は先に、王子さまの登場の経緯からいって、それは飛行士の自己幻視として理解されると述べた。とはいえ王子さまは飛行士の単なる〈分身〉として形象化されているわけではない。この物語がクリスマスの読物として書かれたことから、著者は王子さまにイエス的性格をも付与しているのである。これについてルドルフ・プロット神父は次のように述べている。「王子さまの話している言葉のなかには、「イエスの心」が響いており、『星の王子さま』の本全体に聖書の教えや聖書によく見られるイメージ・できごと・表現が反映していることに気づかされます」（同著、『「星の王子さま」と聖書』、パロル舎、1996、11-12 ページ）

王子さまにイエス的性格が付与されていることについては、単にそれがクリスマス用の読物だからという以上に内的な必然性があるように思われる。なぜなら、聖書においてイエスは、〈あること〉の存在様式・生き方を徹底して追求した人物として描かれているからである。これらのことに関心のある人には、プロット神父の著書を読まれることをお勧めしたい。

（未完）